

審査の結果の要旨

氏名 佃 悠

論文題目 高齢者の居住を支える行動拠点の拡がりと役割に関する研究

本論文は、超高齢社会を迎え、高齢者が増加していく日本において、高齢者の地域とのかかわりを場所利用の視点から明らかにすることをテーマにしている。健全な高齢者のプレ高齢期から高齢期への移行期の場所利用および異なる3地域の要介護高齢者の場所利用の実態調査から、利用場所の中でも特有の行為や人とのかかわりがみられる行動拠点に着目し、その拡がりや役割を明らかにするものである。

本論文は全7章で構成される。

第1章では、研究の社会的および理論的背景についてまとめ、研究の目的、位置づけ、構成、調査概要、分析の方法について述べている。

第2章では、既存集合住宅団地である柏市豊四季台団地居住者を対象とし、プレ高齢期から後期高齢期までの場所利用の変化、主に健全な高齢者の日常生活にみられる行動拠点、その行動拠点の就業期からの関連性について明らかにしている。

場所利用の変化については、特に医療・購買施設について、団地周辺を中心としながらも、年齢が上がるごとに遠距離に位置する場所の利用が少なくなっていることを示した。また、65歳以上の健全な高齢者について、世帯、性別毎にサポート関係、利用場所、行動拠点を整理し、利用する医療・購買施設等が自宅周辺に限られていく中で、行動拠点については、主に仕事や趣味の場所がみられ、行動範囲を広げる役割を果たしていることを示した。特に、元々仕事をしてきた人は、「新たに職場を求める」「役割を見いだす」「職場に代わる場所を見いだす」「職場周辺の拠点とかわり続ける」といった、職場とそれに関わる場所とのかかわり方が高齢期においてもみられ、プレ高齢期から高齢期の移行期における地域とのかかわり方として重要であることを示唆した。

第3章では、第2章でも対象とした豊四季台団地に居住する要介護高齢者を対象に利用場所と行動拠点の拡がりについて明らかにした。

外出の契機は限られており、家族や介護サービスから物資や移動のサポートを受けることにより生活を補っているが、単身世帯でも一人での移動が可能であれば、団地内および団地周辺の範囲で利用場所を確保するなど、団地という徒歩圏での計画が有効に働いている様子がみられることを示した。

第4章では、過疎地域に暮らす要介護高齢者として、名寄市に住み、通所介護施設を利用する高齢者を対象に利用場所と行動拠点の拡がりについて明らかにした。

買物は家族がおこなうため、利用場所自体が少なく、大半が市立病院や老舗デパート等市街地の特定の施設の利用に限られることを示した。また、夏冬通じて外出自体が少ないため、通所介護施設が家族以外の人と交流する接点となり、買物会等の行事により普段利用しない場所をつなぐ役割を果たしていることを示した。

第5章では、3つの富山型デイを利用する高齢者を対象とし、利用場所と行動拠点の拡がりや富山型デイが持つ役割を明らかにした。

富山型デイ利用者の要介護度は、一般の通所介護施設に比べて高く、容易に外出できない高

齢者も多いが、富山型デイの役割として、「経路地としての役割」、「人と出会う場所としての役割」、「趣味等の場所としての役割」、「普段いる場所としての役割」、「住まいとしての役割」があることを示し、これらが重度高齢者の在宅生活を支えていることを示唆した。さらに、これらの役割を実現させているのは富山型デイの運営上や場所としてのフレキシビリティであることを指摘した。

第6章では、第3、4、5章で分析をおこなった豊四季台団地、名寄市、富山型デイ利用高齢者の利用場所や行動拠点の拡がりを比較するとともに、富山型デイの特徴を参考にして豊四季台団地および名寄市において、今後継続的居住を可能にするために必要な行動拠点について考察をおこなった。

特に、名寄市では、重度高齢者は入院や入所してしまうことが多いことから、富山型デイのような共生型デイがあることにより、重度化した高齢者の在宅生活を支える可能性があることを指摘した。

第7章では、各章を総括し、本研究で得られた知見をまとめ、高齢期における行動拠点の持つ意味と地域とのかかわり方を示した。

以上のように本論文は、行動拠点という新しい視点を用いることで、地域とのかかわりながら長い高齢期を在宅で生活することに寄与する場所の持つ役割について明らかにしたものである。このような理由から、今後の高齢者の居住に関して方向性を示唆する研究として、建築計画学の発展に大いなる寄与となりうるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。